



GOOD NEWS と きの こ え

War Cry

4月号

福音版
2026
April
No.2904

二〇二六年 四月一日発行

明治二十八年創刊

福音版・毎月一日発行 広報版・奇数月十五日発行

イースターって

なあに？

本村いずみ



イースター(復活祭)は、イエス・キリストが人間の罪の身代わりとなって、信じる人々に永遠の命を与えるため、十字架にかけられて死んだ後、三日目に復活されたことを祝いする、キリスト教会で最も大切なお祭りです。クリスマス(降誕祭)とは違い、基本的には、「春分の日の後の最初の満月の次の日曜日」に祝われるため、年によって日付が変わります。

最近ではイースターも春の季節のお祝いとして、テーマパークのイベントのテーマになり、きれいな装飾がされ、かわいい小物なども売られるようになっていきます。(イースターの卵)も身近になってきて、卵を使ったレシピもたくさん紹介されています。これは、昔ドイツで、野菜や果物などがとれなくなる飢饉があり、イースターのごちそうをつくられず、卵に色をつけて子どもたちを喜ばせたことからきたそうです。また、うさぎのモチーフも親しまれています。卵を森の中に隠し、子どもたちが教会からの帰り道、森のあちこちできれいな卵を捜していた時飛び出してきたうさぎと出会ったことがあったそうです。それ以来、うさぎが卵

を運んでくるという言い伝えから、(イースターバニー)と呼ばれるようになりました。卵は死んだような固い殻の中からはひよこが出てくることから、イエス様が墓からよみがえったということと結びつけられました。

わたしたちは、生きていく中でいろいろなことが起こります。大きな戦争や災害があちこちで起こり、また日常生活の中でも思いもよらないこと、不条理と思われる出来事、病気や死がどこにでも潜んでいる中で生きています。もうどうしようもなく身動きもとれず、縮こまって閉じこもり、何もできないと思うようなこともあるかもしれません。わたしの存在なんて誰も気にかけてくれることはない、もうダメだと諦めてしまうこと、投げやりになることもあるかもしれません。

でも、わたしたちのことを気にかけ、すべてを知っていて見守り、愛してくださる方がいるのです。一人ひとり、わたしたちは愛されている存在なのです。わたしのために、あなたのために、神の御子であるイエス・キリストは死んでよみがえられ、そして救ってく

ださったのです。そして救い主は今も、わたしたちがどんな状況であっても共にいてくださるのです。だからイースターはあなたのためでもあるのです。

イエス・キリストがこの世界に生まれてきたのは、わたしたちを救うため、人間の罪の身代わりとなって死ぬためでした。わたしは法律にふれるような罪は犯していないから関係ない、というのではなく、罪とは神様を信じないで自分勝手に生きることを、悪と知っていながらすること、また正しいことと知つていながらおこなわないことです。ですから、すべての人は罪をもっているのです。あり、イエス・キリストは、すべての人のために、身代わりとなってくださるためにこの地上にいられたのです。

「神は、その独り子をお与えになつたほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」(ヨハネによる福音書3章16節)

ハッピーイースター！
イースターの喜びと希望が皆様の上にありますようにお祈りいたします。
(救世軍士官(伝道者))

作品よりも、 人こそが大切

スティーブン・コップさん

救世軍では礼拝での賛美のためにブラスバンドが用いられています。救世軍英国及びアイルランド軍国の本部に属するブラスバンドはインターナショナル・スタッフ・バンド (ISB) と呼ばれています。コルネット奏者、また楽長 (指揮者) として ISB で長年奉仕をし、今年1月に楽長を引退したスティーブン・コップ氏が信仰と奉仕について語りました。



— あなたは一九七五年からインターナショナル・スタッフ・バンド (ISB) に属し、一九九四年四月から楽長としてバンドを率いてきました。三十二年にわたって ISB 楽長を務めることを予想していましたか？

いいえ。私は救世軍士官 (伝道者) ではない者として初めて ISB 楽長に任命されました。これまでの年月は本当に光栄なこと、一瞬たりとも当たり前だと思ったことはありません。

実は、一九九四年には ISB を離れるつもりだったんです。そのことを、一九九三年に当時の楽長ロバート・レッドヘッド大佐に相談していました。私はその時、ISB で十五年間首席コルネット奏者を務め、ヘンドン小隊 (教会にあたる) の楽長も務めていました。学位を取得したばかりで、幼い子どもも二人いました。演奏活動に少し疲れを感じており、もう一年だけ続けてから身を引こうと考えていたのです。

ところが九三年の十一月、ロバートが転任するという発表がありました。自分が楽長になるとは露ほども思っていないでした。楽長

は士官が務めるものだと思っていたので。

ですから、当時の英国の救世軍司令官から、引き受けてほしいと電話があった時は本当に驚きました。ISB に入った時、私の計画では五年ほど演奏するつもりでした。その五年が、気がつけば五十年近くになっていたのです！

— 一九七五年に ISB に入団した時は、どのような雰囲気でしたか？ また、前任の楽長たちの思い出は？

大学を卒業したばかりで入団しましたが、そこには成熟した救世軍の信徒たちが大勢いました。彼らからは、言葉以上に多くのことを学びました。レイ・ボウズ大佐補が新しく楽長に就任した時期で、バンドにとって再調整の時期でもありました。レイの任期の初期に加わったことは幸運でした。当時のバンドは、ほぼ救世軍の職員だけで構成されていました。週に三回、昼休みに、それに加えて水曜日の夜に練習がありました。さらにウェストミンスター・セントラル・ホールでの毎年の大きな集会や、ウイリアム・ブース記念士官

学校の木曜日の夜のコンサートもありました。万国本営 (救世軍国際本部) の活動と密接に結びついた、非常に多忙な時期でした。私は、職員ではない数少ないメンバーの一人でした。

レイは類まれなクリスチャンの紳士であり、すばらしい音楽家でした。その後任のロバートはまた異なるアプローチで、レバートリや礼拝への取り組み方を変えました。現代的なワークショップ・ソングが使われ始めた時期で、救世軍とロバートはそれらをバンドの働きに取り入れました。ロバートもまた紳士であり、難しい課題に立ち向かうことを恐れませんでした。彼の任期はそれほど長くはありませんでしたが、ISB とその働きへの貢献は計り知れません。ロバートは私にとってすばらしい助言者であり、今も恩義を感じています。

— 楽長によって個性は異なります。ご自身のリーダーシップをどう表現されましたか？

それは他の人に聞いてみないとわかりませんね。私自身はどうだったか？ 私

はバンドの伝統を尊重し、ISB を通じた音楽伝道の使命に献身し、救世軍の「今」に即した存在であり続けたいと願ってきました。ISB が、現代において意味をもち続けるために、絶えず再創造されなければならぬという事実を尊重してきました。自分なりに最善を尽くしたつもりです。

私は「卓越性」という言葉を大切にしていますが、音楽において最高を目指す際、そこに私たちの魂を込めることを忘れてはならないと考えています。

— 年月を経て、アプローチに変化がありましたか？

かつての私は「楽長とはこうあるべきだ」という、硬直したイメージをもっていましたが、自分自身も、今、より自分らしくいられるようになったと思います。日々の運営に関しては、少し規律を緩めました。パundeミックの間、週に一度 ミーティング で集まり、お互いの交わりを大切にしました。その期間に交わした個人的な会話や電話を通じて、メンバー一人ひとりのことや、彼らの抱える課題をより深く知ることができました。

以前よりも「関係性を重視する」楽長になったと言えるかもしれません。もちろん、バンドのメンバーはまた違った意見をもっているかもしれませんが！

——パндеミック後、最初の練習のことを覚えていますか？

ロックダウンが明けて最初の練習は、本当にすばらしいものでした。メンバーが熱意をもって階段を上がってくる姿を見るだけで感動しました。最初に何を演奏したかは覚えていませんが、とても感情のこみ上げの瞬間でした。

——指揮、演奏、運営の中で、最もやりがいを感じるのはどの部分ですか？

一番好きな曲は何かと聞かれることもあります。正直に言って、「作品よりも、人こそが大切」だと申し上げたいです。これまでバンドで共に歩んできた人々こそが、私にとって何よりの宝です。

また、日曜日の礼拝の一部を担うことも非常に大きな喜びです。ISBが土曜日から日曜日にかけて小隊を訪問する際、私の重点の

一つは、日曜日の集会や午後のプログラムを、土曜日のコンサートと同じように充実させることでした。私がいづつも感じていたのは、訪問先の小隊での奉仕は、同時に、ISBのメンバー自身が養われる機会だということ。現在、メンバーのうち十四、五人がそれぞれの小隊で楽長や唱歌隊長(聖歌隊リーダー)を務めています。彼らが小隊に戻った時に、ISBでの経験が活かされ、意義ある奉仕につながると思っています。

——プラスバンドを聴いたことがない人に薦めるとしたら、どの作品を選びますか？

ジェフリー・ノブスの「Prelude on "Lavenham"」(ラベナムの前奏曲)などが本当に力強い作品だと思います。人生を語る美しい賛美歌としての歌詞があり、同時にプラスバンドの響きの価値を伝えてくれます。

また、聴衆がより洗練された救世軍プラスバンドの音楽を求めているなら、レスリー・コンドンの「The Present Age」(現代)を挙げます。物語を語る音楽のすばらしい例です。一九六

八年の作品ですが、今でも色褪せていません。レスリーは私のヒーローの一人でした。

エリック・ボールの「The Kingdom Triumphant」(神の国の勝利)も、音楽を通じて物語を伝える見事な作品です。

新しい作曲家の作品をいち早く目にし、時間をかけて彼らの音楽的成長を目の当たりにできるのは、バンドにとって特権です。例えば、カナダのマーカス・ヴェナブルズは忠実に作品を送り続けてくれており、彼の成長を見るのは喜びです。彼の最新作の一つ「Holy Forever」(聖なる永遠)は、初めて演奏した瞬間、大きなインパクトを与えると確信しました。

——活動の軸となっている聖句や歌はありますか？

詩編二三編は、私が若い兵士(救世軍の信徒)として最初に覚えた聖句です。

「主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない」(詩編23編1節) という御言葉は、常に私の傍らにあり、毎日が神様からの贈り物であることを思い出させてくれます。年を

とったせいか、最近よく「祝福」(blessing)という言葉を使っている自分に気づきます。もう一つは「常に主を覚えてあなたの道を歩け。そうすれば、主はあなたの道筋をまっすぐにしてください」(箴言3章6節)です。

歌に関しては、ワーシップ・ソングの「Knowing You」(主を知ること)です。楽長に就任した初期の頃、当時バンドの霊的な導きを担っていた士官が、各地の小隊を訪問する際に新しいワーシップ・ソングを紹介してくれました。その中で最初に演奏したのがこの曲でした。今でもこれを歌う度に、非常に力強く心に響きます。

——ISBと並行して、ロンドン小隊バンドでも演奏し、楽長を務めてこられました。それはあなたにとってどれほど重要でしたか？

私にとって非常に大切なことです。救世軍において自分の所属する小隊や施設で奉仕することは常に基本です。ISBのオーデイションを受ける人には、これはISBのために地元での奉仕を疎かにするものではなく、「エクストラ・マイル」の奉仕なのだと明確に

伝えていきます。大きな視点があることも理解していましたが、私にとって、所属する小隊で伝道に貢献することは極めて重要です。私の小隊の人々が、私がISBと同様に、小隊でも常に献身してきたと感じてくれていれば嬉しいです。

——今日の伝道において、音楽やプラスバンドはどのような役割を果たしていると思いますか？

音楽を通じて人々を教会へ招くという点において、今はかつてないほど大きな機会を与えられていると感じています。プラスバンドは救世軍の中でも、多くの

人が関わりやすいグループの一つといえるでしょう。必ずしも規則や制服に縛られる必要はなく、ただ人々を招き、音楽という特別な贈り物を分かち合うことができるのです。これは本当にエキサイティングなことですよ！

すでに、コミュニティ・バンドや初心者バンドを通じて、このようなプラスバンドの特質を活かしている小隊があり、そこから信仰を見いだす人々も現れています。音楽が救世軍の歩みに変化をもたらすことができるといふ私の信念は、今も揺るぎません。



2026年1月24日(土)にロンドンのリージェントホール小隊で、コップ楽長のISBでの奉仕50周年を記念するコンサートが開催されました。以下のURL、QRコードから視聴できます。

<https://bit.ly/SArmySC50>



創立者 ウィリアム・ブース 大將 リンドン・バッキンガム (万国本営 英国ロンドン)

日本司令官 スティーブ・モーリス (救世軍本営 東京都千代田区)



世界をみつめて

〈チリ〉山火事被災地への支援

2026年1月半ば、夏の猛暑と乾燥に見舞われる中、壊滅的な山火事がチリ南部のビオビオ州を襲い、広範囲に深刻な被害をもたらしました。750戸以上の家屋が焼失等の被害を受け、少なくとも20人が亡くなり、火災の急速な拡大により約5万人が避難を余儀なくされました。



現地の救世軍の災害対応チームは速やかに活動を開始し、被災した地域への支援をおこないました。緊急のニーズに優先して対応し、食料、飲料水、生活必需品の配布を実施。士官(伝道者)やボラ



ンティアは近隣の2つの小隊(教会にあたる)を拠点に炊き出し所を設置し、継続的な支援を進めています。また、家や大切な人を失った家族に必要な不可欠な精神的、霊的ケアも提供しています。チリの救世軍は、物質的にも霊的にも人々を支えるため、迅速に、思いやりをもって対応を続けていきます。

(2026年1月30日付)

〈モザンビーク〉洪水被災地への支援



2026年1月、アフリカ南東部にあるモザンビークの南部・中部で、激しい長雨により深刻な洪水が発生しまし

た。現地の救世軍はマプト州で緊急支援をおこない、マトラやカテンベの被災した家庭に食料や衣類を配布しました。緊急災害時の対応トレーニングを受けた救世軍のリーダーは迅速に組織立てて行動し、効果的に地域を支援することができました。一方で、広範囲のコミュニティにおいて食料不足や収入の喪失による生活への影響が続いており、特に子どもや高齢者の生活は厳しい状況です。

現地では、救世軍国際本部の国際緊急支援部による「ラピッド・レスポンス」事業を継続し、地域のパートナーとも協力して、300世帯に食品(豆、米、砂糖、油)や石けん、生理用品、バケツ、浄水タブレットなどの衛生用品を提供しています。困難な状況はいまだ続いており、被災した地域の復興には多くの時間と努力が必要です。引き続き祈りと支援が求められています。(2026年2月4日付)

☆『キッズ・ゴスペル』コーナー☆
(子ども向け紙面)

左のQRコードから、今月の『キッズ・ゴスペル』を閲覧できます！ 聖書のお話も動画で見られます。ぜひ、ご覧ください！



救世軍とは？ What is the Salvation Army?

救世軍は、世界134の国で活動するプロテスタントのキリスト教会で、国際本部は英国ロンドンにあります。1865年、英国のメソジスト教会の牧師ウィリアム・ブースと妻カサリンによって始められ、東ロンドンのスラム街で困難な生活状況にある人々に助けの手を伸べつつ、神様の愛を伝えてきました。日本では1895(明治28)年に英国から士官(伝道者)たちが来日して、救世軍の働きが始まり、現在、131年目の歩みを進めています。

世界各地において、救世軍はアルコールに依存しない生き方を勧めており、救世軍の兵士(信徒)は酒類に頼らない生活を選択します。これは創立当初からの立場であり、アルコールの過度な摂取が身体と心に及ぼす影響が、本人だけでなくその家族や社会にまで害をもたらすことを憂慮して生まれたものです。アルコールに縛られない生き方があることを、救世軍は伝え続けています。救世軍の国際見解表明「アルコールと社会」はホームページでご覧いただけます。

飲酒による健康被害にご注意ください！

新年度は歓迎会等で急性アルコール中毒が毎年発生しています。近年の研究では少量の飲酒でも健康リスクが指摘されています。アルコールは心身に影響し依存症の危険も伴います。十分にご留意ください。

自分と周囲の健康と安全を守るため、飲酒の影響を正しく理解しましょう。ご確認ください!!



救世軍公報 ときのごえ
発行日 福音版/毎月1日、広報版/奇数月15日
定価 福音版/1部40円、広報版/1部100円
(税込) クリスマス特集号(12月1日号)/1部100円
振替 00180-5-4400
発行兼 救世軍
印刷人 代表者 スティーブ・モーリス
編集人 平本 祐子
発行所 救世軍本営 <https://www.salvationarmy.or.jp>
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17
電話 03-3237-0881(代表)
Mail jpn.editorial@jpn.salvationarmy.org
印刷所 有限会社コーチ印刷



聖書は新共同訳を使用しています ©共同訳聖書実行委員会 ©日本聖書協会 救世軍は、旧統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、下記救世軍にご相談ください。

【取り扱い支部】

救世軍への連絡をご希望の方は、以下の中から該当する項目及び住所氏名をご記入の上、救世軍本営(左記)もしくは、上記救世軍にご連絡ください。
・私の近くの救世軍を紹介してください。 ・キリスト教についてもっと知りたいです。
・『ときのごえ』の購読を申し込みます。 ・相談を希望します。